世界の茶の文化セミナー

―「受講ノート」（文責：市民活動団体“堺なんや衆”理事　前田秀一）　―

日本と中国　茶文化の比較

首都大学東京　非常勤講師
博士（文学）　趙　方任

1．日本と中国　茶文化の認識錯誤

日中茶文化の比較を語る時、まず日常のお茶と文化としてのお茶を分けて考えなければいけないと思う。

日本では、日常のお茶と文化としてのお茶が異なっている。なかんずく、文化のお茶においては、流派というものが存在し、精神性においてさらに異なっている。つまり、千利休が大成した当時の茶の湯そのものが今に伝えられ生きている。

その点中国では、日本の場合のように日常の茶と文化としての茶を分けることが難しい。

つまり、中国では常に“おいしさ”を追求して、時代に応じてそのあり方が変化しており、精神性にも重きを置いたが、流派と言うものはなく、陸羽（733～804 年）が作り上げた当時の茶のたしなみ方とは全く違っている。

1980 年以降、特に台湾などにおいて茶芸と言う流儀が出てきたが、これは、むしろ日本の茶道に見習って精神性とお手前を融合させようという動きであって、日本の茶道に比べたらまだ本格的な流派と言える代物ではない。

また、日本からでは、中国でウーロン茶はメインではないかという認識があるが、中国本土では緑茶を飲み、ウーロン茶は全体の約 5%を占めるにすぎないなど、日常の茶においても、日中の相違点がよく見られている。

さて、以上ご紹介したことが今日の「日本と中国　茶文化の比較」というテーマについてのお話の要点であるが、順次、以下に事例を挙げながら日本と中国の茶文化の比較について掘り下げてみたい。

2．歴史と茶文化史に見える中国茶文化の特徴

唐時代（618～907 年）では、蒸した茶葉を乾燥する方法として茶葉を固め真ん中に穴をあけてひもを通し乾燥させた固形の茶とし造られた。そして、飲む時は固形茶を粉にして、鍋にその固形茶を入れ煎じて飲んでいた。宋時代（960～1279 年）には茶碗の中に固形茶の粉を入れ、茶筅でかきまぜて飲んでいた。元時代（1279～1368 年）には、お茶の中にバターやチーズなどいろいろなものを入れて飲むのが流行った。明時代（1368～1644 年）になって製造法から飲用法まで大きく変革され、主流として、これまでの“固形茶”から“散茶”（できあがりの茶は固形ではなく、ばらばらの状態になっている）に変わり、ほぼ現在のように茶葉を入れて飲む飲み方になった。清時代（1644～1911 年）は明代の喫茶方をそのまま受け継いだ。

中国には、「文士茶」というものがあったと考えたい。それは、“茶人”が自ら規範を重視してもてなす日本の「武士茶」とは違って、“茶童”を使ったりのように、形をそれほど重視せず、精神的なリ

ラックス、精神の陶酔感を追求するのを目的としていた。

中国では、作法はあくまで美味しさを追求するための手段としての手順であって、精神性とはまた別のものであった。盧仝（ロドウ：775～835）の詩「七碗茶詩」に「茶を飲めば、もう山にあり、空を飛んでいるようだ」という詩があるが、中国人はお茶の美味しさに関心がありお茶で心を養うとは言いながら、実際には使用人にお茶を入れてもらって優雅さを楽しむというものであった。その場のお茶は、金には糸目をつけないで美味しい「一杯の清茶」を求めるという風潮があった。

一方、日本では抹茶や煎茶が入ってきてから形式美に価値を見出し、精神性を重要視してその伝統をそのまま守ってきたため喫茶法そのものには大きな変革はなかった。

日本の茶の文化は、その源流は中国から伝来したとは言え、中国の流れをそのまま受け継いだものではなく、ましてや、中国の茶の文化の支流でも分枝でもない。つまり、両国の茶の文化の相違は、両国の時代環境の変化だけでは説明し切れない面もあり、両国の文化の相違が大きく起因していることは間違いない。

なかんずく、現時点における相違について言えば、中国では19世紀後半からの中国社会の激変に負うところが大きいと思われる。いわゆる“百年戦争”（アヘン戦争：1840～1842 年を起点とする一連の戦争）で中国の茶の生産伝承が崩壊し、喫茶文化の主役を担う“文人”集団（知識人集団）の縮小による中国における茶の文化的なイメージが萎縮した。

日常の茶と融合した茶の文化的な風潮の回復の兆しはあるものの、まだまだほど遠いと思われる。

3．日本と中国　茶文化の比較

1）仏教との結びつき方について

日本では、奈良時代（8 世紀）から平安時代（8～12 世紀）にかけて空海や行基ら僧が唐に留学した際に薬用として茶の種を持ち帰ったと伝えられているが、茶の伝来がより鮮明になったのは、1191年、宋に留学した日本の臨済宗の開祖・栄西（ようさい）が臨済禅とともにお茶の種を持ち帰り佐賀県の背振山、平戸の千光寺に植えたのが茶の源流とされている。

栄西は、1211 年に『喫茶養生記』を著わし、中世のころには大徳寺派の役割が大きく、禅宗が家元の修業に大きく関わって「一心得道」の掛け軸が貴重された。日本の場合は“茶”と“仏教”、とりわけ“茶”と“禅”がある程度一体化していた。

中国でも、茶の仏教とのかかわりは早くからあり茶の発展に寄与したが、これは、仏教界では禁酒および夜飲食をしないという習慣があり携帯式の飲茶につながり発展を促すことになっていた。

趙州禅師の『喫茶去』によれば、茶は仏教、特に禅宗の僧侶の日常茶飯事の一部になっていた。仏教の寺は、山にあり、茶は山の産出物で、茶は自然の一部分、そして次第に禅の関連物として愛されるようになっていた。

文人（いわば、知識人）は、「出世できなければ、即ち独自で自分の身の良さを守り、出世すれば、即ち兼ねて天下を良くする」という美学から、仏教に心を寄せている証として出家者との交流を保ちお寺のシンボルである茶を身近に所持しておくようになった。

明時代以降、文人たちは、いわば脱俗者の知性と清廉性のイメージを保つほか、自然に親しむ手段として茶をたしなみ、さも茶文化の愛好家の風情をかこい振舞った。茶は、単なる飲み物にすぎなかったが、文人（知識人）の風流好みの対象であったから、当時は、金に糸目をつけるものではなく高価な飲み物であった。

「身不出家心出家」（身は出家しないが心は出家する）。文人（知識人）たちは仏教の脱俗風情を羨ましいとしながらも、政治などへの関心があって出家できない身分にあり、また、仏教の厳しい修業にもついていけないので、お寺のシンボルである“茶”を持って自由自在に楽しみながら仏教への縁を保っていた。

2）政治との結びつき方について

日本で千利休（1522～1591 年）によって「茶の湯」が大成された中世のころ、“茶”の文化は諸国大名に対して先進文化の象徴と位置付けられ、権力につながるためには“茶”の文化をたしなまなければならなかった。茶道具など茶の湯の文化は、戦功の褒美としても与えられ役割を果たしていた。

一方、武士は、常に死を覚悟した存在でありながら、必ずしも仏教には帰依はしていなかったが、茶の湯の文化をとおして仏教につながっているところがあり、また、粗放（そほう）な武将の修業手段としても推奨された。

中国では、明朝創始者で初代皇帝に就いた朱元璋（1328～1384 年：在位 1368～1398 年）が、唐時代から続いていた“団茶”を製造過程が過酷で民力を疲弊しているとして“団茶”禁止令を出して、その後の“散茶”の発展のきっかけをつくった。その実は、朱元璋が安徽省の貧農の出身であったため固形茶を飲みなれておらず、美味しくないという理由であったとも伝えられている。

一方、北宋最後の皇帝・宋徽宗（1082－1136）は自ら『大観茶論』を著わし、芸術面で天才を発揮し文化財などを保護したが政治的に無能力であったために、最後は亡国奴として追われた。また、清朝第 6 代皇帝乾隆帝 （1711－1799）は、中国歴史の中で最もお茶、特に龍井茶を愛し茶詩を多く書き遺したが、皇帝の権力を利してとりたてて政治の場に茶を持ち出すことはなかった。

茶の聖典とも言われている『茶経』を著した陸羽を代表とする茶人たちは、政治の場や統治の場に“茶”の文化を位置付けようと努力したが成功せず、茶の文化は中国の時の中央権力と結びついて政治的に利用されたという事例は少なかった。

3）集団行為と個人行為としての茶の文化

日本では、亭主がいて、自ら“しつらえ”をし、客人を“おもてなし”をすることを基本として“茶会”が成り立っている。このように亭主と客人の組み合わせから成り立つ集団的行為に基本を置いているために茶の作法が変質しにくい状況にあったと言える。

中国では、一人で飲む茶は″神“、二人の茶は“趣”、三人で飲む茶は“のどの癒し”、七人八人は“茶を施す“といういわれがある。集団において“施される”茶の例として“闘茶”があるが、これは人間関係形成のためのコミュニケーションに主眼があるのではなく、「勝者登仙不可攀、輸同降将無窮恥」（勝てば、仙人になったように偉くなり、近よりがたい。負ければ、投降した将のようにその恥は窮まりない）。あくまで個人の勝負の場である。このように、中国の茶は、個人の価値判断に主眼が置かれていたので変化しやすかった。

4．日本と中国の茶の文化について

日本では、茶の湯の文化は千利休が大成したものであったが、中世から近世にかけて武家社会に取り込まれ、規律を重視し、作法にこだわり身体を使った振る舞いを大事にして、修業の道として当初の姿を変えることなく伝えてきた。

中国では、陸羽が『茶経』としてまとめ大成したが、あくまで文人（知識人）趣味とした茶のたしなみであり、個性を重視し理屈を楽しみ口頭で語ることを主体として繋いできたため、形式美として残

らずその時代の文人趣味に依存して変化していった。

中国では、日常的な「茶文化」と言う用語の使用は 1980 年代ごろから始まり、まだその歴史は浅い。「茶文化」とは、茶の採摘、加工、販売、飲用、政策、喫茶習俗、喫茶心理など、つまり人間が茶を利用するあらゆる面を含むが、広義には、茶の栽培、日常の喫茶など茶に関する全てのことを、狭義には、日常の喫茶の上に生れる茶の作法、茶の芸術性、喫茶の思想や精神世界などを指している。

最近、日本の茶道に影響されて香港や台湾では茶芸が行われるようになってきたが、現代の中国で日常生活の中に以下のような茶文化の風習はまだ残っている。

①結婚の際の嫁入り道具茶

茶樹は、どこにでも栽培できるが移植が出来ない樹であるため、婚姻の安定を祈って、嫁入りの際に嫁入り道具の定番になっている風習が今も残っている。

日本国内においても中国古来の“釜炒り茶”の製法を今なお引き継いでいる福岡県（八女茶）、佐賀県（嬉野茶）、熊本県（青柳茶）および大分県（青柳茶）でもこの風習は残っている。

②清廉性のイメージ

茶は倹約のシンボルとして古くからそのイメージが定着し、そして「身不出家心出家」（身は出家しないが心は出家する）。茶は有徳者の飲み物として清廉性の認識がある。

③心を落ちつける飲み物

中国では茶館（喫茶店）は以前より減ったものの、茶は静かで心を落ちつける飲み物があるとの認識がある。

④健康飲料

古代より、本来的な効能としての薬用の認識は高く健康飲料という認識がある

以上

趙方任氏　プロフィル

1970 年中国吉林省生まれ　北京大学卒業後、新聞社勤務後 1996 年来日
2004 年東京都立大学大学院博士課程にて学位取得
博士（文学）－「茶詩を中心とする古典文学に見える中国茶の文化史の変遷」
現在、首都大学東京、大妻女子大学、桜美林大学非常勤講師